

# 堀内新泉の宇宙探検

—— 科学小説の起源が語るアンチ・ミメーシス

ストリツポリ・ジュセツペ

## 要旨

明治後期に活躍した作家堀内新泉は、立志小説と植民小説というジャンルの枠組みの中で論じられてきたが、明治末期に冒険雑誌に載せられた探検小説群は注目されてこなかった。本論では彼の探検小説の一部を占め、現代のSFの作品として認められる宇宙探検を語る「三大冒険雑誌」の二つである『探検世界』と『武俠世界』という雑誌に掲載された「水星探検記」（一九〇六）、「金星探検記」（一九〇七）、「月世界探検隊」（一九〇七）、「少年昇天記」（一九一〇）という四つの短編小説を扱う。確かに明治時代では科学小説（SF）は文学ジャンルとしては確立されていなかった。しかし、堀内新泉の作品が示すように、科学小説的な物語が全く存在しなかった訳ではない。彼の宇宙探検を扱った作品は、明治から戦後に至るまでの多種多様な文学作品から成る、いわゆる「SF古典」の一つの例として捉えることができる。このような視点から彼の宇宙作品群を分析することで、SF古典作品が探検小説、冒険小説、科学小説などの枠組みで認知されていた明治時代まで日本SFの起源を遡って考えることができる。日本近代文学が確立されはじめた明治期に、思弁的な空想を取り扱うSFというジャンルを設定することにより、日本近代文学の一つの特徴が浮かび上がる。それは、坪内逍遙が『小説神髓』で確かなものにした、文壇の中心を占める現実主義文学に対する、ありのままの現実から距離を取る「アンチ・ミメーシス」という特徴である。



## 1 はじめに

一九〇六年九月に刊行された雑誌『探検世界』の「探検小説」というセクションの中に「水星探検記」と題された、明治・大正期に活躍した作家・堀内新泉の最初の宇宙物語が掲載された。本文のテキストより断然大きく「水星には人類が住んでいる」と印刷されたタイトルで始まるセクションがあり、次のページには「水星人類の捕獲」という見出しがついた宇宙人の挿絵が紙面を飾っている。この挿絵には、賑やかな大勢の観衆に囲まれて、水星人がどつしりと立っている場面が描かれている。このようなテキストのセクションに添えられたタイトルと挿絵という二つのパラテキストの要素からは、日本の草創期SF（サイエンス・フィクション）のいくつかの特徴が見られる。まず、科学技術のディスクールとSFが密接に関わっているという特徴であり、先ほどの例にこれが表れるのは、宇宙における生命を思弁することで想定された登場人物としての水星人の使用である。つぎに、「アンチ・ミーメチックな」(anti-mimetic)、つまり非模倣的な物語、すなわち、思弁文学の定義をした Marek Oziewicz が指摘したような、「一般的な見解の現実の本当らしさ」<sup>(1)</sup>から離れた物語の一種を表現しているという特徴である。さらに、これらの二つの特徴を合わせて考察すると、異質性の可能性を含んでいるという新たな特徴も確認できる。つまり、数多くの他の文学ジャンルの枠組み内においてSFの存在を認識することができるという点である。例えば、以下で焦点を当てる雑誌『探検世界』の場合では、冒険小説及び探検小説という異なる文学ジャンルの中においてSFの存在を見出すことができる。

先行研究においては明治から昭和時代半ばにわたる幅広い期間においてSFの存在があまり注目されてこなかった。

たのは、SFというジャンルはこのような異質性という特徴を持っているからではないだろうか。異孝之は戦後のSF同人誌「宇宙塵」(一九五七〜二〇一三)と日本の最初のSF専門誌と呼ばれる「SFマガジン」(一九六二〜二〇一三)の創刊には、日本における「組織された運動としてのSFの起源」<sup>(2)</sup>があると主張した。異の主張を敷衍すると、「組織された運動としてのSF」とみなすことができるようなSF専門誌は戦前にはないので、戦前におけるSFの検討は困難なことであると言わざるを得ない。しかし、文学ジャンルの起源と発展というプロセスの中で「組織された運動」が果たしている役割自体をここでは問題にしたい。異の主張は、戦前におけるSFは一つのSF専門誌や本シリーズだけに限られる独立したジャンルだとは言えないことに支えられている。しかし、戦前においては、他の文学ジャンルを無視したSF的な文学の検討はかなり難しいことであり、そもそもSFを他のジャンルから切り離すことはあまり効果的ではないだろう。Darko Suvinが指摘したように、「文学ジャンルは、正確な歴史的位置づけが可能でしかも興味をそそる生態学的単位として存在する―たがいに作用をおよぼしまじり合いながら、またたがいに相手を模倣し相手を食い潰そうと生態学活動をくり返しながら」<sup>(3)</sup>のである。日本のSF的な文学は、まずは明治期における未来記、政治小説、冒険小説、探検小説という、当時認識されていたジャンルの枠組みの中で見られ、そして昭和期に入ると、全盛期の探偵小説の枠組みの中でも確認できる。

明治後期の冒険雑誌や「科学世界」、大正・昭和期の「科学知識」、「科学画報」、「新青年」、「無線電話」などの、文芸誌ではない雑誌も含む多種多様な雑誌群に掲載された文学作品だけではなく、欧米のSF文学とCamille FlammarionやSimon Newcombのような科学的な知識の普及家の作品の翻訳などもSF的な空想を膨らませた。ここでは、異孝之の研究対象を広げ、石川喬司、横田順彌、長山靖生、Robert MathewなどのSF研究者が戦前のSF的な文学に目を向けたアプローチを支持し、発展させていきたい。

以下では、明治後期から大正初期に至る期間に堀内新泉が執筆したいくつかの宇宙物語を分析することで、いわゆる古典SFを検討する際、SFは他の文学ジャンルと密接な関係を持ち、それらの違うジャンルとの関係を考慮に入れることが効果的なアプローチであり、SFの起源の重要な要素である「異質性」を示したい。さらに、既に明治初期に顕著になっていた科学の普及という現象が堀内の作品の中で様々な形で表れているということにも焦点を当てたい。そのうえで、坪内逍遙の『小説神髓』が嚆矢となった現実的且つ模倣的な文学とは対立した「アンチ・ミメーチックな」（非模倣的）文学の一つの表現として堀内の作品を取り扱い、SFの発想を表している堀内の作品と同時代文壇との関係を明らかにしたい。

## 2 堀内新泉と宇宙物語

堀内新泉（堀内文麿、一八七三〜？）は当時いわゆる純文学の作家たちの間で小説家、詩人として認識されていた人物である。その評価がある程度まで高かったことは、例えば、堀内の「夏海邊」という作品が一九二七年刊行の『現代文豪傑作選集』に入っていることから見られる。堀内に関する伝記的情報は多くはないが、彼の執筆活動は十分に知られている。京都府生まれの堀内は、平民の教育を目指していた数人の国文学者からなる大八州学会が一九〇年代の初めに創立した大八州学校に入学し上京。学生の頃から既に啓発的な小説を書いていたということが分かって<sup>(4)</sup>いる。その後、第一高等中学校を中退したが、徳富蘇峰が発刊した「国民新聞」で文筆生活に入り、「読売新聞」と政府との間に軋轢が生じたため連載が頓挫した幸田露伴の小説『雪粉々』の執筆を露伴の門人として引き継ぎ、完成させた<sup>(5)</sup>。堀内の最初の作品は家庭小説という宣伝文句で出版された。しかし、それでは商業的な成功を収

める事ができなかったため、立志小説というジャンルで紹介された作品を執筆しはじめ、一九〇二年から一九二〇年代の初頭にかけての時期には毎年少なくとも一作ずつは発表していたことから、このジャンルの最も多作な作家の一人であるとされる。<sup>(6)</sup>一九〇五年六月に立志小説として「立志小説人乃兄」が成功雑誌社から発表され、その後は、彼の立志小説は「人乃兄の著者」という言葉で宣伝され、十年後に第十五版まで増版されたことから、この作品は堀内の最も成功を得た立志小説と考えられている。<sup>(7)</sup>さらに、主に成功雑誌社の雑誌「成功」に連載された数多くの立志小説が出版されたのを契機にこのジャンルと堀内とは切り離せない関係となつてゆき、成功雑誌社は堀内を「立志小説界の泰斗」として自社の様々な雑誌で宣伝していた。<sup>(8)</sup>

しかし、立志小説は堀内に貼られた唯一のレッテルではない。他にも、家庭小説や植民小説、探検小説なども執筆した。先行研究では堀内の立志小説と植民小説は論じられたが、探検小説として発表された作品群は注目されてこなかった。しかし、堀内の探検小説は、成功雑誌社のもう一つの雑誌『探検世界』の中で中心的な役割を果たしてきた。堀内の探検小説は『探検世界』の創刊号（一九〇六年五月）から同誌に最後に掲載された彼の作品は一九一〇年十月号にであるため、雑誌が廃刊になる一九一一年までのほとんどのすべての期間にわたつて数多く掲載されてきたことが分かる。この作品群の大多数は雑誌の探検事実譚というセクションの中に掲載されたもので、一号で終わる短編小説である。一方、数は劣るが「黄金島探検物語」（一九〇八年六月〜一九〇八年十二月）や「探検小説霹靂艦隊」（一九一〇年七月〜一九一〇年十月）などの長編小説も存在する。

堀内の探検小説の中には宇宙探検というテーマを扱うSF的短編小説もある。他の探検物語と比べると、数は非常に少ないが、SFとはかなり趣を異にする様々なジャンルで活躍していた作家がそのような物語も執筆したことから、明治期末に普及していた科学とそれに対する興味と関心、そしてフィクションを創作するために用いるテーマとして

の科学の重大な役割を窺うことができる。堀内の宇宙物語は「水星探検記」、「金星探検記」、「属金星探検記」、「月世界探検隊」、「少年昇天記」という少数の短編小説のみで、『武俠世界』で出版された最後の作品を除いて、全てが『探検世界』で出版された。しかしこれらの作品は、堀内の研究者ばかりでなく、「宇宙探検に強い興味を抱いたSFの一人の先駆者」という言葉で堀内を簡潔に紹介した長山靖生のようなSF研究者たちにもそれほど注目されてこなかった。そこで、ここではこれらのSF的な作品群に絞り分析したい。そうすることによって、そこに現れている堀内のSF的発想が、同時代文壇に通じる問題系を有していることを明らかにすることができる。と期する。

### 3 『探検世界』と「明治三大冒険雑誌」

堀内の宇宙物語を分析する前に、それらが出版された雑誌『探検世界』の文脈に注意を向けたい。『探検世界』は、『冒険世界』と『武俠世界』と共にいわゆる「明治三大冒険雑誌」の一つであるとされる。横田順彌によると、これらの雑誌が対象にしていた読者層は十五歳から二十歳までの若者であり、いずれもメン・マガジン、つまり少年向けの雑誌だと考えられる。<sup>(9)</sup>これらの雑誌はSFの専門誌とは言えないが、ここで注目したのは、いずれも数多くのSF的な作品を掲載したため、思弁的な空想がみられ、SFの起源を考え直すために非常に価値のあるものとして取り扱うことができると考えられる故である。

「明治三大冒険雑誌」は明治二〇年代と比較的早い時期から発展した、非常に活発的な、特に東京に集中していた出版業界によって出版された。明治後半に雑誌と新聞に大きな影響を与えたのは日清戦争と日露戦争であったが、それは戦争に関わる国際的な出来事について情報を得たいという希望を抱いていた読者が多く、写真という当時の近代

的メディアも駆使し、戦争に関する情報で満ちていた新聞や雑誌はこれにより、拍車がかかったためであると考えられる。

「明治三大冒険雑誌」の中でも、『冒険世界』と『探検世界』はやはりそれぞれ戦争と関係を持っている。『冒険世界』は直接日露戦争から生まれた文化的産物として見てもよいだろう。戦争を写真を使うことによって語ろうとした「日露戦争写真画報」という雑誌が、終戦に際し、まず『写真画報』という誌名を改し出版を続けたが、一九〇八年に海底軍艦シリーズという架空戦争を描くSF的な作品で人気を博した押川春浪の主宰の下に改めて『冒険世界』として新たな計画の下で刊行を続けた。<sup>(1)</sup>『探検世界』の場合は、『冒険世界』とは違って、戦争時に生まれた雑誌の直接的な変身ではないが、雑誌のテキストからは日本帝国の拡大と国際的な威信への憧れが明らかに表れているところから、戦争との関係が垣間見える。『探検世界』の創立者兼編集者であった村上濁浪（本名・村上俊蔵）は、春陽堂出版社に勤めた後、成功雑誌社を創立した。この出版社で最初に創刊された雑誌は、アメリカの雑誌『Success』を手本にし、出版社の最も重要な雑誌となった『成功』であった。成功雑誌社の他の雑誌としては、一九〇六年に創刊された『探検世界』や、堀内新泉も投稿していた『植民世界』などが挙げられる。成功雑誌社の雑誌群を合わせて考えてみると、それぞれに主に二つのテーマを取り扱っていたことが窺える。一つは、探検であり、もう一つは当時出世という概念で捉えられていた成功である。後者は、個人の視点からだけでなく、むしろ国という単位での集団での成功という視点から考察してみると、成功と探検という二つのテーマが密接に関わっていることが窺われるだろう。『探検世界』は帝国主義で満ちた日本の海外への拡張を支持している記事を掲載したばかりでなく、海外への進出の変異でしかない探検を具体的にサポートしていた雑誌であり、先ほど指摘した関連を証明する典型的な事例である。

雑誌に掲載されたテキストのジャンルと内容に関しては、『探検世界』は性質を異にする様々な種類のテキストに

よって構成されているため、明治期の他の冒険雑誌と同じように、はつきりとした範疇に分類することが難しい。雑誌は文学作品とノン・フィクションや、世界中からのニュース、学校旅行のための注意点を含む記事などからなるパッチワークのようなものである。このような種類が豊富なテキストが、複数の鏡によるシステムの要素のように互いに影響し合うことで、ノン・フィクションと科学知識の普及を目指すテキストの科学的な情報が物語に染み渡り、同様に物語に特有のいくつかの要素が—例えば物語の枠を通じて紹介する科学的な話—普通に物語性の乏しい科学的なテキストにも入り込む。

雑誌の構成を検討する際、パラテキストのレベルに焦点を当てたい。Gerard Genetteによると、パラテキストとはテキストを構築するものとその外に残されるものとのテキスト的な空間を意味している。<sup>(12)</sup>従って、後程分析する『探検世界』の宇宙物語は、その延長線上で捉えられる雑誌そのものがどのように当時の読者に提供されたかという問題を検討するためにパラテキストという要素が非常に有用だと考えられる。『探検世界』はいずれの号も多数のセクションからなっているが、その状態は、この雑誌の比較的短い歴史の中でかなり変化していった。いくつかのセクションはなくなり、他のいくつかのセクションは新たに付け加えられたので、雑誌の構成に関する編集計画はそれほど明確なものではなかったと思われる、むしろ、編集者たちが用途の広いテーマで使用される探検という共通の特徴に沿って多種多様なテキストを集めたように見受けられる。探検のテーマは「探検事実譚」や「探検新聞」や「探検小説」などのセクションでは明らかに見られるが、実際の旅行記と物語として紹介される旅行というような様々な形で旅を取り扱う他のセクションにも現れる。また、「珍事異聞」や「破天荒」のような違うセクションの題名でよく見られる探検に関わるもう一つのテーマである驚異にも焦点を当てたい。上述の二つのセクションの主な効果は、セクションが紹介するニュースと話の内容の不思議で奇妙な驚くべき性質を目立たせることによって読者の関心を駆り立たせる

ということである。『探検世界』に描かれた科学と技術への関心は驚異を語り、そこで語られた驚異は科学と技術というほかの要素と交流し、一種のハイブリッドな場を作っている。

『探検世界』における科学と技術への関心からは、先ほど指摘した帝国主義と植民地主義に繋がる探検と驚異という二つの要素を検討することで、明治後期のS Fの発展を窺うことができる。日本が国際的な位置を占めようとしていた帝国主義時代は、科学技術がそのイデオロギーに密接に関わり、日露戦争後に生まれた雑誌の中で中心的な役割を果たした。こういった科学技術のディスカールの表現こそが雑誌の内容を形作り、古典S Fの必須条件のひとつである科学的な空想と思弁に刺激を与える可能性をもたらしたのである。日本の古典S Fは、欧米諸国の草創期のS Fの表現と同様に、冒険小説に非常に近い物語構造を持っているという特性が見られ、それらの物語の中では驚異をもたらす科学と技術が重要な役割を果たしている。

以上述べた古典S Fの必須条件の一つである科学技術のディスカールは『探検世界』の一九〇九年一月号に掲載された「怒濤庵漫筆」という匿名のテキストに見られる。この雑誌の中で頻繁に使われた「探検小説」というセクションはフィクションもノン・フィクションも含んでいた。ここから分かるのは、「探検小説」は幅広いテキストの種類を意味し、他の冒険雑誌の動力であった当時の社会に広がっていた探検と冒険への関心を反映している言葉であるということである。しかし、冒険雑誌は探検と冒険への関心という『探検世界』との共通点を有しているが、実際に複数の冒険雑誌に書いていた作家らにとっては、探検と冒険という二つの概念は一致しているとは限らなかった。この二つの概念がそれぞれのものを意味していると主張したのは「怒濤庵漫筆」の著者であり、次のように述べる。

『探検世界』一たび世に出てからは探検の大交流と成って、新聞に、雑誌に、探検記事の出で居らぬのは殆ど無

い様にまで発達した。が、依然として誤解は続いて居る。分り切った誤解が継続されてある。それは探検と冒険との混同である。冒険は考え物だ。冒険の気風を国民の頭脳に注入するという事は、教育家の間にも大分喧しい議論の有る事で、百害有つて一利無しとまで通論する人も少なくないが、僕も亦其方の一論客たるを發表するに躊躇しないのである。探検は然らず。準備有り、目的有り、秩序有り、すべて人事の盡せるだけの手段を整へた上で事を行ふのである。科学的頭脳を以て軍隊的行動を執るのである。<sup>(13)</sup>

以上のテキストが掲載された『探検世界』の号より僅か数ヶ月前に『冒険世界』の創刊号が出版されていたため、著者の批判的な言葉がまもなく競合雑誌になった『冒険世界』に向けられていたことは想像に難くない。また、冒険と探検は別々の概念として取り扱う必要があり、前者はただの危険な考え物（空想）であるのに対して後者は軍事的且つ科学的に役に立っている一面があると主張した著者の批判は、『探検世界』の作家らも対象にしている可能性もある。著者が非難したこととは異なり、『探検世界』のテキストはよく冒険と探検が同一視され、以下で検討する宇宙物語はその曖昧さが明確に表れている。宇宙物語というものは考え物（ファンタジー）でありながら科学的頭脳に基づいた物語なのである。

#### 4 堀内の最初の宇宙物語「水星探検記」

堀内新泉の最初の宇宙物語は「水星探検記」と題された短編小説で、『探検世界』の一九〇六年九月号に掲載された。宇宙探検というテーマを取り扱う作品で、先ほど述べた探検と植民地主義との関連がよく表れた作品である。

冒頭では、「近頃佛国は懸賞して、若し太陽系各星との交通を開くべき機関を案出するものがあれば、四萬弗の賞金を與えることとあります」<sup>(14)</sup>という新聞記事を彷彿させる文章が紹介され、そこから主人公兼語り手が、その記事についてのコメントを述べ、読者を物語の中に導く。語り手によると、そのようなニュースを聞きまでもなく、地球の隅々まで探検した人間ならばとうの昔から宇宙への憧れを抱いており、残念ながら地球上での探検のために使われる交通機関では宇宙まで行くことが叶わないという理由で、人類は今まで、心の中で宇宙へ行くことしかできなかった。しかし、語り手の親友である天兒壽という医学博士は、彼の友達である宇良上新造<sup>うらかしんぞう</sup>という理学博士の手助けを得て、「二種の飛空器、イヤ寧ろ昇天器」<sup>(15)</sup>という言葉で紹介する太陽系各星の交通を開いた機械を既に発明し、水星探検隊を組織した。新式の飛空器はどのような機械なのかは一言も述べられていないが、ここで注目したいのは探検隊の探検は、後程明らかになるように、ほとんど完璧な成功をおさめるのだが、発明した機械はその成功の最初の表れであるということである。欧米の諸国との比較は明確には述べられていないが、上述した冒頭の新聞記事にフランスのニュースが述べられることにより、日本の博士たちが、「心志あれば便宜あり」<sup>(16)</sup>という出世的な考え方を持つことで他国に先駆け早く宇宙へ飛べる「昇天器」の発明という偉業を成し遂げたことがわかる。

次の日に出発する予定の勇気な探検隊の十人の前途を祝すために、語り手である主人公が「水星探検倶楽部」と呼ばれる場所を訪問すると、そこで乗組員に探検隊への参加を誘われ、元々北極へ探検に行く予定であった本物の探検家の語り手は、よろこんで水星探検隊に参加にする。そして、乗組員との会話を通じ、探検隊の最終目的が地球外生命体の捕獲であることが明らかになる。本作では、地球外生命体の捕獲が最も重要なテーマであり、このことにより紙面を割くために本来探検の一つの大事な部分であるはずの宇宙船での旅行の記述が、地球からの出発から水星に着陸に至るまで完全に省かれる。その代わりに、より多くの言葉が地球外生命体という問題を描写するために使われて

いる。欧米諸国の科学者によれば、水星には生命ばかりでなく人類の存在も確かなことであるとされるが、だれも水星人を実際に目にしたものはないため、水星探検倶楽部の探検家らはその発見を目指そうと決心する。ここも、欧米諸国と日本との対照が明らかになる一点の一つだが、地球外生命体の捕獲を執行することで得られるのが国際的な威信であることは見落としてはならない。語り手はそれをはっきりと次のように述べる。「今度我々がその目的を達すれば、世界に向かつて、大いに誇りとすべき価値があるのでございます」と。<sup>(17)</sup>

本作品の地球外生命体の捕獲からは当時の日本の対外意識を看取することができ、地球外生命体との遭遇に特異な点がある。それは、他者を認識するために科学が用いられ、さらにその科学が他者と自己との差異を図る物差しに用いられる点である。

水星に着いた探検隊は早速惑星の猛烈な暑さの上砂漠のように乾燥した地球人には厳しい環境を探検しはじめる。やがてはげ山の麓で一服している探検家らが近くに大きな横穴があるのに気づき、そこから大怪物が動き出しているのを発見し、皆何ものか確認もせず銃を撃つ。一同が撃ち倒したものをみるためにそこに走り寄ると、ある学者が屍を観察し、その生き物が水星の人類だという鑑定結果を下す。そこから物語の中心と考えられる、比較的長い場面が始まる。それは殺した宇宙人の検死である。この場面では、鑑定結果を下すのは天兒医学博士であり、探検隊のうち一人は水星人の研究を記録するの用に写真を撮っているが、同時に彼は殺した宇宙人の徹底的な検死を行った上で宇宙人の身体的な特徴も測定するというように語られている。身体的な特性の詳細な描写は進化論と環境決定論の視点から解釈された身体構造を羅列することにより、科学的な記事の文体で述べられている。なかでも一番最初の測定対象として頭蓋骨を選択したことには、十九世紀後半から流通する人種差別的な疑似科学・骨相学が影を落としている。歴史家 Michael Adas は骨相学と十九世紀の科学的な言説の間で強められた人種差別との関係について次のよ

うに述べた。「十九世紀のヨーロッパの人々が捉えていた人種の科学的な研究の要素の中では、一般の人々の態度により大きな影響を及ぼしたのは骨相学であった」と。<sup>(18)</sup>

頭蓋骨の形、長さ、固さの記録は医学博士の客観的な羅列の僅一点である。肩と足、目、耳、鼻、毛、口などの他の身体の要素も羅列のそれぞれの点を占めている。検死の前に語り手が「ある人が写真を撮る」と言及していることから、探検隊の一人が写真を撮っていることがわかるが、その写真を撮るといふ動作が比喩的に示すように、このような形で述べた描写はS F的な空想の特徴の一つの要素である。それは、本作が使用する、非現実的な物語の展開と、そこにおける現実味を持たせる物語の語り方との対照ということである。本作ではその現実的な趣向の語り方が特に明らかに見られるのは、医学博士の屍の観察、加えて探検隊の一人が写真を撮っていること、そして語り手が述べる客観的な観察である検死結果の羅列である。

しかし、科学というレンズを通じて知られ、解釈され、そして類型化される他者が物語の結末では知識の征服の対象から具体的な征服の対象に変化する。水星の猛暑のため、探検家らは早く宇宙船に戻り、地球に帰らなければならぬが、地球外生命体の捕獲を主な目的として来た探検隊は、まずその目的を達しなければならず、サブテンの下で寝ている水星人を見つけると、忽ち手と足に鎖をつけ、捕まえてしまう。探検隊はこの水星人を土産として地球に持ち帰ろうとするが、この狩猟は意外な展開を迎える。暖かい環境に住んでいる宇宙人は地球への宇宙旅行の途中で凍死してしまうのである。ただし、失敗に終わったと思われる結末は語り手にとっては依然成功でしかない。語り手は物語の終盤にこの最後のエピソードについて次のように述べる。

死骸丈でも、地球に持って帰ることの出来たのは、何よりの喜びであります。今にその屍骸を博物館に出しま

すから、皆さん何うか、御一覽を願います！<sup>(20)</sup>

ここには、科学のもう一つの面、すなわち、娯楽としての科学という面が窺える。こうして、科学が知識でありながら見世物的な役割を持つ博物館や博覧会などで観られる娯楽としても用いられるのは、この時代に始まった現象なのである。

## 5 「月世界」特集と「月世界探検隊」

既に述べたように、「明治三大冒険雑誌」のいずれも、ほとんど全ての号にSF的な作品を掲載している。しかし、SFのような思弁的・空想的な文学への関心を示している最も明らかな事例は、『探検世界』の「月世界」（一九〇七年十月）と『冒険世界』の「世界未来記」（一九一〇年四月）の二つの特集である。以下では、「日本で最初の雑誌のSF特集」<sup>(21)</sup>と考えられる、『探検世界』臨時増刊号「月世界」特集に焦点を当て、その中の一つの物語である堀内新泉の「月世界探検隊」を分析する。

表紙からは既に「月世界」の思弁的且つ空想的な一面を垣間見ることができる。表紙には星空に浮かんでいる小さな飛空船に乗って、学生帽を被り、学ランのような服を着ている二人の若者が望遠鏡で夜空を眺めている様子が描かれ、飛空船の上に大きな満月が際立っている。月が現実的に描写されている特集の中の多くのテキストとは異なり、表紙の月の絵はのつべりとしたただの大きな黄色い円盤型のものとして描かれ、その真ん中に特集の題名が行書体で書かかれている。飛空船の乗組員の装いと夜空に散らばっている星、そしてその天文学的な特徴を欠いている満月の

描き方から、『探検世界』の編集者らが念頭に置いていた読者層は若い世代であることが改めて確認できるだろう。

『探検世界』の他の号と比較すると、「月世界」は、編集者が構成をしっかりと組み立てようとした意向がより明確に表れている。構成としては、テキストは「小説」、「新体詩」、「学術」の三つのセクションに区別される。その中では「新体詩」が最も短いセクションで、岩野泡鳴によって書かれた「月と猫」という僅か一つの詩から成っている。最初のセクションである「小説」は八つの短編小説から構成され、最後のセクションである「学術」は科学知識の普及を意図した七つのテキストが集められている。「学術」のテキストは、東京大学での勤務経験のある早乙女清房という天文学者によって執筆されたエッセイ「月と地球との関係」のように、主に平易な言葉で月に関する基本的な天文学的情報及び特徴を提供する。しかし、その中では、天文学という枠組みからは遠いエッセイも見られる。例えば、悠々歌客の「日本国民の月世界文学」は月のイメージを使った、日本と中国の数多くの歌を紹介する。また、芙蓉学人の「月と潮汐との話」では、著者が、もし月がなければ、そしてその光がなくなったら人類の人生にとっては何の変化もないと大胆な意見を述べる。しかし、もし月の影響を受けて起こる地球での潮汐がなければ実際のにも非常に大変なことになるはずだと続ける。芙蓉学人は、当時の一つの近代的な概念であった衛生を地球、つまり環境に繋げ、地球の衛生には潮汐が必要不可欠であると論じる。そして、思弁的な話題に入り、石炭埋蔵量が尽きた近未来を想定し、再生可能資源の必要性を考慮に入れ、潮汐の力を利用した水力発電の可能性を提案する。

特集号の構成と内容、つまり物語的な「小説」とエッセイ的な「学術」の併置は、フィクション的なテキストとフィクションではないテキストとの間の境界をぼかす効果が見られる。全てのテキストが月に関わるものなので、科学技術のディスクールが必然的に短編小説群が構築するフィクション的な世界に侵入し、そしてある程度までの物語性がエッセイの中でも見られる。二つの異なる種類のテキストがお互いに交流し影響し合うのだ。特集のアンチ・ミメー

チックな（非模倣的）特徴を持つ短編小説はこの交流の一つの表象だと捉えても差し支えないだろう。先ほど分析した「水星探検記」の場合でも同じことが言える。つまり、科学技術のディスコースが物語の中に様々な形で現れ、物語の構造と内容を形づけ、現実的であり同時に非現実的でもある物語世界の創造に科学技術のディスコースが影響を与えるということである。しかし、「月世界」特集の場合、特集のセクションから明らかになる独特のパラテキスト、つまり先ほど述べた構成のため、この影響をより一層明らかに窺い知ることができるだろう。さらに、そういったパラテキストを考察すると、SFというジャンルの起源のひとつがどのような文脈を有していたかという問題を検討することができる。その文脈は、特集が示すように、科学技術の情報で満ちた啓蒙的なエッセイと文学という二つのものが具体的に同じ雑誌の紙面という空間を共有しているという文脈である。

特集の物語は科学技術の極めてポジティブな見方を共有している。「産業社会が反人間的な世界をもたらすという概念が明治後期と大正時代の戦前文学で盛んに発展した」と Susan Napier が指摘したが、「月世界」、より広げて言うと、『探検世界』という雑誌の様々なテキストは、科学の楽観的、驚異的な面のみしか描写を認められない表現の一種として見ても良いだろう。

特集号に掲載された短編小説群は、石井研堂の「月世界独力探検」のように、月への旅行という計画に焦点を当て、詳しい計画の立て方、そして月まで行き、地球の博士らの説く月に関する様々な説を自分の目で見、肌で感じて確認しようという目標を達するための努力を描いた物語もあるが、他の作品は主に同じような物語展開を共有している。それは、月への旅行を通じて短編小説の中で、個人的な成功を収める、あるいは国家レベルでの名誉を獲得する、という展開である。特集の最初の物語である堀内新泉の「月世界探検隊」は、テキストを飾る挿絵で描かれたツェツペリンのような形をしている飛空船と考えられる「空前の一大新機関」<sup>(23)</sup>に乗り組んだ探検隊の宇宙冒険譚となっており、

火星を旅した探検隊が地球への帰路の途中、月に着陸し、そこで繰り広げられる月の人々との接触を描いたものである。

作品の冒頭では語り手が技術の可能性と知識の発展との結びつきについて次のように述べる。

今より僅一世紀以前に於いて、今日広く世界に行はれて居る汽車、汽船、電話、電信などの事に就いて話をしたならば、当時の人は信用したであろうか。「そんな事が人間の力で出来るものか。」と云つて、恐らく世の人一般にそれを否定したであらう。

今日の世の人に向かつて、「今に太陽系各星と自由に交通する機関が出来る。」と云つたならば、世の人はそれを信用するであろうか。(省略) これまで世の人の不可能だと断定して居た所の、太陽系各星に対する交通機関の如きも、最早彼此云つて居る中に何時出来せぬとも限らぬ。<sup>(24)</sup>

物語は一九〇七年の時点から、一九〇二年の探検を紹介する形式となっている。そうすることによって、この探検は過去の出来事であり、科学と技術がもたらす可能性を示唆する出来事として描かれる。「水星探検記」の冒頭の、フランスが太陽系各星の交通開通を目指して懸賞をかけるというニュースを出したがそれは既に日本で開発済みであったという箇所が語るところと同じように、ここでも一般常識の視点から未来に置くべきものは実際に既に過去であるという近代的な進歩の概念が見られる。「月世界探検隊」では日付まではつきりと紹介されることにより、より一層詳しい時間座標が提供される。しかし、ここで注目したいのは、堀内の両作が示すように、ここで紹介している古典SFは未来にそれほど関わっていないことである。より正確に言うと、明治前期の未来記というジャンル

とは異なり、堀内の宇宙物語のようなSF的な文学は未来を舞台にすることがあまりない。それは、特集の短編小説群に共通しているもう一つの点で、先に触れた進歩の概念につながる。堀内の両作では、特集の他の作品と同じように、科学技術の思弁が現代という時空間の中で行われる。そのことによって、作品の中の主な科学技術に関わる進歩は未だににきていないもの——つまり未来の話——ではなく、既に来たものとして紹介されるのである。

数人の博士、詩人や新聞記者からなる探検隊の乗組員が乗る「飛空器」は英国の二人の学者によって発明され、国の援助によって作られたものである。物語の冒頭で語られる宇宙への出発という場面は、次のように記される。

一切の準備を整え、頃しも一九〇二年四月一日を以て、我も我も四方から押寄せた雲霞の如き見送人の大拍手大喝采の中に大英国の国旗を風に翻しつつ二個の飛空器は徐々と英国グラスゴウの地上を離れて難なく空に昇って行ったが、終に蒼冥の裡に影を没して、行方は全く知れぬやうになった。<sup>(25)</sup>

この場面は、フランスで一九世紀半ばに発表されたJules Verneの『地球から月へ』（一八六五年）と『月世界へ行く』（一八七〇年）という二作の月世界小説に共通するいくつかの要素を持っている。例えば、出発の際に大勢の人々が見送りに参加する場面が描かれる点、そして乗組員になるためには、国民の中から厳格な選抜がなされる点、また探検隊の成功によって国が国際的な名声を得る点である。これらの両テキストに見られる類似点から、堀内は、明治二〇年代に起こったヴェルヌブーム、さらに言うと、この二作が、一八八〇〜八一年の井上勤の『九十七時二十分間月世界旅行』をはじめとした、数多くの邦訳で人気を博したヴェルヌの科学小説（*scientifique romans*）を知っていたということが推測される。言うまでもないことだが、ヴェルヌの月世界小説とは違って「月世界探検隊」は探検隊が

月に着陸し探検の成功を収めるという根本的な相違点が見られる。しかし、ここで注目したいのは「月世界探検隊」で科学というものは、大衆向けの行事でもあり、国威の根幹でもあるものとして描かれていることである。

しかし、本作には科学のもう一つの面がみられる。それは、世界を知る道具としての科学である。こういった面は月世界での探検の場面、「天文学を以て有名なグリーンウィッチ天文台のカムベル博士」<sup>(26)</sup>が周りの世界を「読む」として月の地理学的な特徴を伝えるという行動から看取することができる。天文学者は探検隊の中に非科学者の探検家、新聞記者や詩人のような天文学に精通していない人がいることを理由に、まるで演説でもしているかのように、面の地理学的な特徴に加えて月の起源とその他月に関することを述べる。そうすることで天文学者の声を通じて月に関する科学的な情報を読者にも提供する。特集号のいずれの小説も、作品は小さなセクションで分けられているが、天文学者が演説している長い場面ではそのセクションのタイトル「月世界は地球の文化」、「月世界の一日は地球の十五日」<sup>(27)</sup>が演説の大事などころを目立たせるように施されている。このように、学問的な情報を提供することは「月世界」特集の一つの狙いと考えられ、この特集号が啓蒙的な目標を持っていることが分かる。ここで興味深いのは、本誌の中では、科学的知識を紹介する記事のみならず、掲載された文学作品にも科学的な情報が多く盛り込まれている点である。堀内の探検小説は、科学情報が文学作品に組み込まれ、物語の内容に影響を及ぼす一つの事例である。ところが、堀内が宇宙探検というテーマを扱う理由は、技術と科学の進歩を語るため、または科学的な情報を読者に与えるためだけではなく、他者との遭遇を紹介するためでもある。他者との出会いは作品の二つの場面で描写され、一つは月の動物と野蛮的な民族との遭遇であり、もう一つは進歩した文明を持つ民族との接触である。この二つの民族に対する異なる探検隊の態度には当時の日本の対外意識を読み取ることができる。後者の場合は、地球人の探検隊らが進歩した月の文明を発見する。「大厦高樓（高層ビル群のこと）軒を列ねて」<sup>(27)</sup>いる大きな町に着き、街頭を歩く

容貌と態度のいい男女の月世界人、月の真つ暗な夜を照らす電灯や「地球のそれよりもズット進歩した電車鉄道」<sup>(28)</sup>などに極めての関心や驚きを示す。しかし、これと正反対に、前者の場合は、技術的に劣る民族との接触は探検隊にとつて驚異の発見となるが、直ちに他者を支配することへの憧れに転じてしまう。その民族との遭遇は、「飛空器」から乗組員が、H.G.Wellsの『月世界最初の人間』（一九〇一年）で描写されている大きな牛のような巨大動物の群れを発見するところから始まる。その時点までは月面の調査であった探検の目的が狩猟へ変わり、乗組員が一頭の獣を銃殺する。まもなく銃声を聞いた人間めいた怪物がそこにやつて来ると、語り手がそれを次のように描写する。

怪物に視線を注げば、身体には極めて粗製な毛皮の着物を着、眼は銃眼よりも大きく、鼻は馬に似て、耳の形は牛に全然、口は耳まで裂けて手足は人間、満身深い毛に蔽はれて、額の広さと来ては二尺に余り、頭の大きさは大釜を伏せた程あつて、実に異様な姿をして居る。<sup>(29)</sup>

「水星探検記」と同じように、本作でも身体的な特徴の中には額と頭の広さが述べられるが、それとは異なり、検死を行わずに目で観察することだけで人類学者が怪物は月世界の人類であると判断する。また、本作が描く探検も、太陽系の惑星をみるという科学的な面の目的だけではなく、技術的に劣る異界のものを取得しようという憧れも有していることを示唆している。本作品でも地球人らが地球への土産に月世界人を生け捕ろうとするが、今回は宇宙人の捕獲は果たせずに終わる。

## 6 「少年昇天記」と「金星探検記」

堀内新泉の宇宙物語の包括的な分析を行うために、別の二つの短編小説「少年昇天記」と「金星探検記」も分析してみたい。この二つの作品は以上で論じた水星と月での探検物語とは異なり、双方とも科学に裏打ちされた現実らしさに乏しい。

「少年昇天記」は、少年太郎は博士と呼ばれる人物に起こされ、目をさますと、そこは月に着陸したばかりの飛行船で、二人は月世界の地上に足を踏み入れるという場面の描写で始まる。早速二人の登場人物が月の探検を始め、飛行船を使って素早く移動しながら月世界の地理学的な特徴を観察したり、月ならではの現象、一例えば、大気が非常に稀薄なため光と闇との境界が鮮明に見て取れることや、月の引力が地球の引力の六分の一であるために感じられる軽さを体験したりする。月世界人に遭遇した後、地球が恋しくなった少年はできるだけ早く地球に帰りたがるが、一方の博士はどうしても探検を続けたがる。飛行船が故障し地球の家に帰れなくなることを心配して少年はますます怖がると、自分の飛行船がいかにも丈夫な機械であるかを見せつけるかのように、博士は飛行船に乗り全速力で宇宙に飛んで消えてしまう。月に一人置き去られた太郎は自分の叫び声に目を覚まして、なにもかも夢であったということが分かり、物語は結末を迎える。

物語が紹介する月に関する情報とそれが紹介される順番、月面の探検、そして野蛮な民族に属するかのよう描写されている月世界人との遭遇という二つのエピソードからなる物語展開の中心的な部分などの複数の要素から、本作品は「月世界探検隊」の執筆のために堀内が使用した素材と同じ素材に基づいていると見受けられ、「月世界探検隊」

の書き換えであると指摘しても過言ではない。この点に関しては本作品は獨創性を欠いていると言わなければならぬが、「月世界探検隊」とは数多くの相違点も見られる。まずは、登場人物の数と彼らの特性はその一つである。数多くの探検家が登場する「月世界探検隊」とは異なり、本作品の中では飛行船の乗組員を構成しているのは少年と博士の二人のみであり、少年は太郎というありふれた名前前で、博士は名前さえ述べられていないという匿名性により、二人とも二つの典型的なタイプを表現しているのである。つまり、寒がって怖がり、家に帰りがたがってばかりいる子供と、突然目が覚めた子供に月世界という異界の様態を認識させるために、その異界に関する情報を提供するという役割を担う先生という二つのタイプである。二人の登場人物は子供と先生との関係で結びついている。換言すれば、知識の深さが異なっている二つの登場人物であり、天文学に精通している博士から天文学など何も知らない少年への情報の伝達という構造で関わっている。先に示したように、「月世界探検隊」の中では天文学者が演説をすることで探検隊の皆に月に関する様々な情報を提供するが、本作品の中では月の様態を詳細に説明する博士はそれほど学術的な態度を示していない。ここでは、演説の代わりに、数多くの質問とそれに対する応答といった形式の会話によって情報の伝達が行われるのである。「月世界探検隊」と同じように、この作品も啓蒙的な一面を明確に表している。しかし、「月世界探検隊」とは異なり、ここでは啓蒙的な意図は天文学の基本的な情報の提供ばかりではなく、少年、そして少年と同じような立場にある若い読者に重要な教訓を与えるということからも本作品の啓蒙主義的な一面を読み取ることができる。この教訓は、「人は、骨折って学問は仕なければ成らんものだ」という博士の発言にはつきりと象徴されている。さらに、「博士の談話に自分も興味を覚えて来て、寒いには寒い、その寒さが、左程苦には成らんやうに成った」という箇所から窺えるように、少年は学問がもたらす知識の良い効果を体験する。

また、本作品の中では、以下で明治後期の文学の文脈におけるアンチ・ミメーチックな文学を検討するために重要

となる、もう一つの相違点が見られる。それは、「水星探検記」と「月世界探検隊」と比較すると、「少年小説昇天記」はより非現実性が高いという点である。全ての冒険はただの夢であるということは、物語の現実性を無効にし、このような非現実性は作品の最初の言葉である「その時」から既に示唆されているということが思われる。童話の「昔々」と同じように、「その時」という、明確ではない時間を表す表現は、「水星探検記」と「月世界探検隊」の中で使われている正確な時間表現と比べると、真実味を欠いており、曖昧な時空間を特徴している物語世界を構造するのである。

最後に触れる「金星探検記」は、テキストに付いている後注から分かるように、イギリスで出版された金星に関する記事に基づいて執筆された作品だが、ここではより一層高い非現実性を持っている作品として論じたい。「昇天記」と同じように、本作品も「飛空器」に乗っている善一という少年が金星という異界まで連れて行かれた人物に起こされて目を覚ますという場面の描写で始まる。しかし、今回は少年は惑星に着陸した後まもなく一人になり、異界の案内をしてくれるのは、彼と同じように地球からやって来た人ではなく、金星に住み、空を自由に飛べる羽衣を纏った一人の天女である。善一が体験する金星は、天上界という言葉で表され、ユートピア的特徴を持っている場所である。「如何なる顕微鏡で調べても、恐らく一点の汚物を見出すことは出来まい」<sup>(32)</sup> 清い環境の中で善一は金星の豊富な自然に魅せられ、周りの環境の美しさに酔ってしまう。以上指摘した要素から明であるように、本作品は幻想文学の一例として扱ってもよいだろうが、ここで注目したいのは、堀内の他の宇宙物語とは異なり、「金星探検記」の中で技術と科学が強く否定されているということである。作品が描く天上界の天女らにとって技術は全く役に立たないものである。それは、技術の代わりに幻想的な工夫が施されているためである。例えば、遠く離れている人と話す時は、手間のかかる物とされる電話や電信のようなものは一切用いられていない。また、金星で移動する乗り物としては丈夫な雲が使われており、このような乗り物に関して、どのような仕掛けや機関が付いているのかという技術的な好奇心

を持つ主人公の善一には、天女は次のように説明する。「機関などという、そんな野蛮なものは、この世界では一つでも用いませぬ！」と<sup>(33)</sup>。

## 7 アンチ・ミメーチックな文学

これまでに分析した堀内の四つの作品の中では、太陽系の各惑星といった異界との接触を表現する宇宙探検のテーマが様々な形で表れている。「水星探検記」と「月世界探検隊」の場合では、宇宙探検のテーマは、当時の科学技術のディスクリブルを垣間見ることができ、SFの根本的な特徴の一つとされる現実から離れた世界を現実的に描写しようとする試みに沿って物語が構成されている。一方、「少年昇天記」と「金星探検記」という二つの作品の中では、宇宙探検のテーマはそれぞれ現実的な描写から距離を取って構成された物語世界の中で、幻想的な形で表れている。

以上の四つの例は文学が用いる表現の多様性を示すが、加えて、どの文学作品の場合でも例外なく、物語世界の構造の出发点となっている作者と読者が存在している現実の世界から、四つの宇宙物語の物語世界はそれぞれに距離を置いている。そこで、堀内の作品の物語世界を次のようなスペクトルの中で位置づけたい。このスペクトルは、二つの正反対の物語世界が極点を占めている。一つの極点は、現実のありのままの描写として紹介される模倣的な物語世界であり、これと正反対の極点に位置するのは、現実の模倣を否定する非模倣的な物語世界である。そうして、このような二つ極点の間には様々な（非）模倣的な描写の陰影を表現する物語世界が存在している。こういったスペクトルの中では、堀内の宇宙物語の物語世界は非模倣的な極点の方に近い位置を占めていると考えるのが妥当だろう。さらに、「水星探検記」と「月世界探検隊」は、非模倣的な極点の方に近い位置を占めながらも、科学技術のディスクリ

ルを駆使した語り方を通じて、非模倣的（非現実的）な要素を含む物語世界を模倣的（現実的）に描写しようという試みが見受けられる。既に指摘したように、この非模倣的な世界の模倣的な描写という一見矛盾して見える要素はSFの根本的な特徴の一つであり、この特徴を持っている堀内の作品は、日本SFの起源と発展を考察するにあたり検討する価値のある事例として見ることはできないだろうか。

最後に、堀内の作品と当時の一般文壇との関係を検討するために、堀内の宇宙物語をSF的な作品としてだけではなく、日本近代文学のより多様な方向性を持った表現のひとつとしても捉えてみたい。そのような表現の傾向は、明治期に成立した現実主義、写真主義に対し、「アンチ・ミメシス」(anti-mimesis)という特徴を反映した傾向である。「アンチ・ミメチックな」文学とは、現実の模倣から離れる思弁的な文学と言える。堀内新泉の作品は近代日本文学の次のような一面を表している。それは、現実の真実らしく描いた模写を、つまり写真主義の言葉でいうと、ありのままに描いた現実を提供するという要求を抱いていない物語の一種で、(幻想的) 空想的な要素の使用によって非模倣の世界の構築を可能にする物語の一種のことである。堀内の作品の場合は、そういった非模倣世界の構築は、知識の普及を目指す物語の道具でもあり、作品のテーマでもある科学というものが可能にするのである。上述の作品の世界に「アンチ・ミメシス」が顕れているところは、技術的な進歩、例えば、宇宙旅行のできる前代未聞の飛空船を使うことで現実から離れたところである。

堀内のような作品は、坪内逍遙が『小説神髓』で確かなものにした、文壇の中心を占める現実主義文学への言外の批判と見なすことができるだろう。『小説神髓』では、近代にふさわしい芸術としての文学の表現は「模写小説（アーチスチック・ノベル）」<sup>(34)</sup> というものであるとされ、「模写小説」という言葉に「アーチスチック・ノベル」というふりがなをふっていること自体から、坪内逍遙が理論化した小説という概念からは芸術としての小説の形式とその表現

方法との密接な関係を窺えるだろう。逍遙は小説と写実主義（*mimesis*）について次のように述べている。

小説すなはちノベルに至りては（略）世の人情と風俗をば写すを以て主脳となし、平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料とし而して趣向と設くるものなり。／（略）／小説は常に模擬を以て其全体の根柢となし、人情を模擬し世態を模擬し、ひたすら模擬する所のものをば真にせま逼らしむと力つとむるものなり。<sup>(35)</sup>

『小説神髓』の根本的な主張の一つは、人々の生活を文学の最も基本的な対象と見なすべきだという意見である。逍遙は、文学が芸術になるためには、現実の模写的な描写と、人間の模倣という二つの要素を必須条件として挙げている。しかし、堀内の宇宙物語は、これに対し「世の人情と風俗」の模倣の外で隠蔽している物語、つまり非模倣及び非現実の題材を扱う文学の可能性を開く。SFの起源を明治期まで遡ることによって、日本近代文学の初期段階に「アンチ・ミメシス」という特徴を活かす物語の一種を確認し、その上で、数多くある非模倣の文学の多種多様な表現方法の一つとしてSFを考察することができるだろう。堀内の作品は、反自然主義の表現として考えられてきた明治後期の「スバル」（一九〇九〜一三）、「三田文学」（一九一〇〜）や第二次「新思潮」（一九一〇〜一一）<sup>(36)</sup>が展開した反写実主義運動に先行し、反自然主義の雑誌群と同様の、明治期の文壇の中心を成していた自然主義に対する文学史の一つの傾向を表現しているのではないだろうか。

ここまで紹介してきた日本のSFの草創期に関する検討は、SFとはかなり異なっている形態の作品で知られている堀内新泉という作家に焦点を当てることにより、当時の科学技術のディスクールがどのように文学作品に入り、そして物語世界の構成にどのような影響を与えたかということを明らかにしてきた。明治時代には、諸外国と同様に、「SF」という言葉さえ存在しなかったが、「自然科学的小説」<sup>(37)</sup>や「科学小説」<sup>(38)</sup>などの造語も明治期から見られることから、「科学」を生かした思弁を使用する文学が存在していたということを窺うことができるだろう。堀内の作品は、編集方針に沿った形で「探検小説」という言葉で雑誌に紹介されているが、現実的に描かれている非模倣的な物語世界を構成している作品としては、SFというジャンルの萌芽を理解するために貴重な事例でないだろうか。

ここでは一人の作家のみに集中したが、明治期のSF的な文学は当時認識されていた他のジャンルとの関係をより明確にするために、今後は「明治三大冒険雑誌」や「科学世界」という雑誌にも目を向け、研究対象を広げていきたい。

## 〔注〕

- (1) 拙訳。Oziewicz, Marek. “Speculative Fiction” *Oxford Research Encyclopedia of Literature*. Oxford University Press, 2017. 二〇二二年七月七日アクセス〈<https://oxfordre.com/literature/view/10.1093/acrefore/9780190201098.001.0001/acrefore-9780190201098-e-78>〉。

- (2) 拙訳。Tatsumi, Takayaki. “Generation and Controversies: An Overview of Japanese Science Fiction, 1957-1997”, *Science Fiction Studies*, 27 (1), 2000, p.105.
- (3) Suvín, Darko. 大橋洋一訳『SFの変容―ある文学ジャンルの詩学と歴史』国文社、一九九一年、五九頁。  
*Metamorphoses of science fiction*. Yale University Press, 1979, p. 21.
- (4) Wachutka, Michael. *Kokugaku in Meiji-period Japan: the modern transformation of 'national learning' and the formation of scholarly societies*. Global Oriental, 2012, pp. 216-17.
- (5) 幸田露伴「序文」幸田露伴・堀内新泉『雪粉々』春陽堂、一九〇一年、一〇一七頁。
- (6) Van Compernelle, Timothy J. “A Utopia of Self-Help: Imagining Rural Japan in the Meiji-Era Novels of Ambition”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 70 (1), 2010, p. 66.
- (7) 同(6) 七二頁。
- (8) 和田敦彦「立志小説」と読書モード：辛苦という快楽』『日本文学』四八(二)、一九九九年、二四〇二五頁。
- (9) 長山靖生『日本SF精神史(完全版)』川出書房新社、二〇一八年、一三〇頁。
- (10) 横田順彌『日本SFこてん古典(1) 宇宙への夢』集英社、一九八四年、一四一頁。
- (11) 同(9) 一二四～一二七頁。
- (12) 拙訳。Genette, Gérard. *Paratexts: thresholds of interpretation*. Cambridge University Press, 1997, pp. 1-2.
- (13) 「怒濤庵漫筆」『探検世界』七(二)、一九〇九年、一六頁。
- (14) 堀内新泉「水星探検記」『探検世界』一(五)、一九〇六年、四五頁。
- (15) 同。

- (16) 同。
- (17) 同四七頁。
- (18) Adas, Michael. *Machines as the Measure of Men: Science, Technology, and Ideologies of Western Dominance*. Cornell University Press, 1999, p. 294.
- (19) 同 (17) 四八頁。
- (20) 同五〇頁。
- (21) 同 (10) 一四五～四六頁。
- (22) 拙訳。Napier, Susan J. *The Fantastic in Modern Japanese Literature: The Subversion of Modernity*. Routledge, 1996, p. 186.
- (23) 堀内新泉 「月世界」 『探検世界』 四 (三)、一九〇七年、二頁。
- (24) 同 (23) 一頁。
- (25) 同三頁。
- (26) 同二頁。
- (27) 同一〇頁。
- (28) 同十一頁。
- (29) 同八頁。
- (30) 堀内新泉 「少年小説昇天記」 『少年小説 武俠世界』 三 (二)、一九一三年、二五頁。
- (31) 同 (30) 二六頁。

- (32) 堀内新泉「金星探検記」『探検世界』三(三)、一九〇七年、二五頁。
- (33) 同。
- (34) 逍遙協会編『逍遙選集 別冊第三』第一書房、一九九七、五五頁。
- (35) 同二一、四八頁。
- (36) Chiba, Shunji. "Between the Western and the Traditional: Mori Ōgai, Nagai Kafū, and Tanizaki Jun'ichirō." *The Cambridge History of Japanese Literature*, Haruo Shirane, Tom Suzuki, and David Lurie (ed.), Cambridge University Press, 2016, pp.624, 626.
- (37) 石川喬司『SFの時代―日本SFの胎動と展望』双葉社、一九九六年、一六一頁。
- (38) 同(9)一〇五頁。

〔付記〕 本稿は、第四十四回国際日本文学研究集会（国文学研究資料館主催、令和三年五月）における口頭発表の原稿を基に改稿したものである。

